

社会から見た私たちの在り方～ボランティア学習学会を通じて～

活動先：日本福祉教育・ボランティア学習学会・名古屋大会学生実行委員

私たちは11月28日、29日の二日間に行われる「日本福祉教育・ボランティア学習学会」に参加した。私たちの主な活動は会場設営、会場案内、進行の手伝い、後片付けであるが、大会そのものに大きな意味があることと同様に、このような小さな事にも大きな意味がある。まず設営、これは27日に行われたことであるが会場の設営が無ければそもそも大会を主催することもできないであろう。行ったことはそこまで大きな事ではないにしても、これはとても重要なことである。次に会場案内、参加者の多数は事前に下調べを終えていると思うが、下調べを十分に行えなかった参加者もいるであろうし、また下調べを終え地図も持参しても実際に赴いたことのない参加者も多くいる。実際に県外からの参加者も多数在籍していると言っていた。訪れたことのない地に足を踏み入れることには程度の差はあれ抵抗、不安を感じる人はいるだろう。下調べを十分に行えなかったとあればなおさらである。そのような人たちの不安を少しでも少なくするために案内役を配置する必要がある。そうすることで自分が行くべき道を理解することができ、また案内役が最初に会う関係者であるため、その人の印象によって大会の印象も変わる。こう書くと大げさに聞こえるかも知れないが、最初にあった案内役の印象で大会の参加者のモチベーションも変わるのである。このように考えると案内役といってもただ案内するだけに止まらない、これも大きな役割になると言える。そして進行の手伝い、これは大抵主催するメンバーが行っており、私たちは専らレジユメの配布、ホール前のあいさつが仕事だったがこれも大きな役割がある。レジユメ配布は何人かいる学生で分担して配布することで、余計な時間をなるべく削減することができる。これは進行の際に大きな手助けとなるだろう。またホール前でのあいさつも先程述べた案内役同様良い印象を与えることができる。最初だけでなく大会中も良い印象で続き最後までその印象を残し続けることで大会に参加したことを誇らしく思うことができるほどの良いものにすることができる。これは簡単なことでありだれでもできることと思う人も多いだろう、しかし誰でもできるからこそ私たちが誠意を持って行わなければならないことである。最後に後片付け、27日の場合は後片づけと言うより移動と言った方が正しいが、これを行わなければ次に繋げることはできず、大会をきれいな気持ちで終わらせることができない。しかし大会会場は広く準備にも時間がかかるほどであり、片付けも同様少人数で片付けるには骨が折れるほどである。私たちが協力することでその負担を軽減し、かかる時間を短くすることで次の準備を滞りなく行うことができる。このような小さな事でも大きな意味を持つ活動、これらは私たちだからこそできる事でもあり、私たちがあるべき姿の一つであると私は考える。また、ただこのようなボランティアだけでなく、実際に大会に参加することもできた。そこでは、これからの福祉のあるべき姿が討論されていた。

正直私は最初この大会の話聞いたとき、ボランティアを行う際の心がけ、福祉法人の

これからの在り方などを語るのだろうと思っていたが、予想外の話が飛び交った。これからの福祉の在り方と多少重なる部分はあるが、地域と福祉の繋がりというものが焦点となっていた。今の社会は人と人、人と社会、人と自然の繋がりに欠けており、そこから老人の孤独死、社会から切り捨てられた人々の起こす悲劇、環境問題が生まれると言っていた。そしてこれからの福祉はそのような見えない繋がりを大切にしていくことが大切ではないかという話が出た。私はこの討論以外を視聴できなかったのが全てかどうか判断しかねるが、この表題は今の人々が忘れている問題であり、私たちもまた目の前に映るものばかりに注意を向けがちで忘れてることだと実感した話題であり、私たちもこれからは目の前にある問題だけでなく、それに繋がる見えない問題、社会との関係を理解した上でその問題にどのように取り組むか、また私たちだけでなく周囲がどのように関わるべきかを理解していくことが新たな福祉として確立することではないかと感じた。

これらから私が学んだ今の私たちがあるべき姿とは、まず社会や自分の周りに気付かれないことに目を向け、それらに対してどのように働きかけるべきかということを常に考え実行することができる積極性を身につけるように努力すること。そして周囲の繋がりというものを忘れないようにすること。孤独なものはこの世界には無く、それらが何らかの形で必ず他のものに繋がっていることを理解し、それらを周りに働きかけることが大切だということである。これらは簡単ではないが、一人一人が意識し実行することで必ず実行できるものであるとこの学会を通して私は確信した。